

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 松居竜五

松居竜五氏の「南方熊楠の学問形成」は、南方熊楠の学問形成の過程を、一次資料にもとづき実証的に辿った労作である。

南方熊楠の業績については、1970年代に平凡社から刊行された『南方熊楠全集』（全12巻）によりその一斑を窺うことができるが、残された著作・資料は厩大であり、熊楠研究として残された課題は多い。1991年に『南方熊楠 一切智の夢』（朝日選書）を上梓して以来、一貫して熊楠研究に従事してきた松居氏は、和歌山県田辺市の旧熊楠邸の資料調査と書誌作成に関わり、あわせて熊楠が寄稿した『ネイチャー』『ノーツ・アンド・クエリーズ』掲載の記事の収集及び翻訳を行うなど、熊楠関連の一次資料の整理と紹介に尽くしてきた。2012年には、現在の熊楠研究の水準を示した『南方熊楠大事典』（勉誠出版）を田村義也氏との共編で刊行するなど、既に熊楠に関する多くの編著書を世に問うている。本論文は、このような長年にわたる地道な調査・研究によって開かれた視野を提示するとともに、今後の熊楠研究が進むべき方向を示唆しており、博士論文として高い達成をなし遂げている。

本論文は第一章「教養の基盤としての東アジア博物学」、第二章「西洋科学との出会い」、第三章「進化論と同時代の国際情勢」、第四章「アメリカにおける一東洋人として」、第五章「ハーバート・スペンサーと若き日の学問構想」、第六章「東洋の星座」と英文論文の発表」、第七章「ロンドン抜書」の世界」、第八章「フォークロア研究における伝播と独立発生」、第九章「南方マンダラ」の形成」、第十章「十二支考」の誕生」、及び序章「南方熊楠研究の流れと本研究の位置づけ」と終章「南方熊楠をどのように評価するのか」からなる。

以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

慶応3（1867）年に和歌山で生まれた熊楠は、幼少期から『和漢三才図会』等の抜き書きに励み、博物学への強い関心を育んでいった。第一章は、熊楠が接した和漢の書を具体的に指摘しながら、抜き書きという営みが熊楠の知的活動の中核をなしており、後年のフォークロア研究にもつながってゆくことを指摘する。

第二章は、和歌山中学校に進んだ熊楠が、博物学教師鳥山啓の薫陶のもとに自作した動物学教科書「動物学」を中心に論ずる。松居氏は、稿本として残る未刊行の「動物学」の内容を詳細に紹介しながら、そこに19世紀ヨーロッパの動物分類学に学んだ跡を確認する。

第三章は、上京し東京大学予備門に学んだ熊楠の勉学環境を再現し、熊楠がE・S・モースを通じてダーウィニズムに触れていたこと、東海散士の『佳人之奇遇』によって日本をとりまく国際情勢に目覚めていった経緯などを指摘する。

熊楠は予備門2年目で中途退学し、1887年にアメリカに渡った。第四章は、はじめサンフランシスコに滞在し、つぎにミシガン州に移ってアナーバーの大学図書館や博物館を利用しつつ独学に励み、さらにフロリダ、キューバに滞在して生物採集を行った熊楠の姿を描く。これまで不明の部分が多かったこの時期の熊楠について、松居氏は一次資料にもとづいた記述を行っている。在米中国人との交流や人種意識の目覚めなど、あらたに提起された論点は多い。

第五章は、アメリカ時代の熊楠におけるH・スペンサー受容を論じる。東京大学予備門時代以来強い関心を抱いたスペンサーの思想を、熊楠がどのように摂取し、やがてこれに対する批判的見地をいかにして獲得するにいたったかが、原著への書き込みや土宜法龍宛書簡などをもとに思想的発展過程として記述され、スペンサー批判の視点が熊楠における人類学的関心に接続する様が確認される。

熊楠は1892年にイギリスに渡り、大英博物館で文献渉猟と論文執筆に励む。第六章と第七章はこの時代の熊楠を追うが、第六章では英文論考「東洋の星座」の成立過程を、書簡、自筆ノート、および当時の新聞記事等、新たに発見された資料をもとに、その反響までを含めて描きだす。また熊楠の海外留学を支えた経済的基盤も明らかにされる。

第七章は、熊楠が1895年4月から1900年9月までに作成した52巻に及ぶノート「ロンドン抜書」を紹介する。松居氏の論文は巻末に「ロンドン抜書目録」を収めるが、松居氏自身が作成したこの「目録」の書誌的価値はきわめて高い。松居氏は判読に困難をとまなう自筆ノートの解説を通じて「ロンドン抜書」の内容を明らかにし、そこに航海記・旅行記、異文化交渉史、さらにセクソロジーに関する強い関心が観察できることを明らかにする。

第八章は、『ネイチャー』に掲載された英文論考「マンドレイク」と「さまよえるユダヤ人」に焦点をあてる。熊楠は、類似の俗信が異なる地域に流布する現象を考察するにあたり、独立発生説と伝播説の両者を勘案する。松居氏は、このような態度が当時の人類学の文脈に位置づけられることを指摘しつつ、熊楠のフォークロアへの関心が比較説話研究として一つのかたちをなすこと、別の英文論考「燕石考」では共感理論なるものが参照されていることを論じる。

第九章は、真言宗の僧侶土宜法龍との往復書簡を通じて、熊楠が「南方マンダラ」として知られる独特の世界観を形成してゆく過程が記述される。熊楠は因果律を説明する原理としての「事の学」に言及し、さらに真言密教との接触を経由して「萃点」という概念に到り、これを曼荼羅を想起させる図とともに考察しようとする。松居氏はこれを熊楠の粘菌研究とエコロジーへの関心に結びつけて考察するのである。

1900年に帰国した熊楠は、1904年以降田辺に住まい、柳田国男や高木敏夫との交流を織り交ぜつつ、日本語による著述活動に専念するようになる。第十章は、『太陽』に連載された「十二支考」を扱い、「腹稿」と呼ばれる自筆メモからその生成過程を辿る。この章においても、一次資料にもとづいて熊楠の著作の成立を具体的に記述しようとする松居氏の態度が顕著である。

審査委員からは、奇人と評されることの多い熊楠を等身大の人間として捉え、その学問形成をきわめて実証的に跡づけた功績が高く評価された。本論文が、南方熊楠研究において画期をなすであろうことは疑いない。一方で、審査の場においては、本研究の持ちうる学問的文脈に関する質問があったほか、明治末・大正期の日本の知的状況や帰国後の活動に関する記述が薄いこと、論文叙述が時に禁欲的にすぎることなどが指摘された。誤記、脱落が見られる部分もある。ただしこれらは、本論文の挙げた成果を本質的に損なうものでないことも、審査委員により確認された。

以上の判断により、本審査委員会は、松居竜五氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。